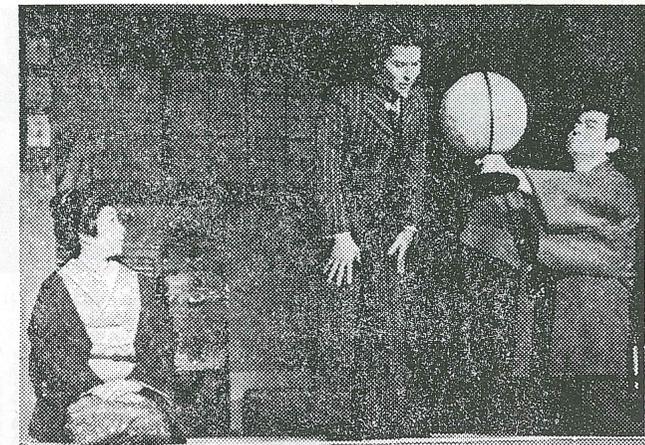




港商人の一時代を活写

「海鳴りやま」情味十分の月丘



高畑誠一（仲真貴＝中央）の新しい知識で、金子直吉（藤岡琢也）は世界への目を開かれる。左は鈴木よね（月丘夢路）

神戸のポトピア社に合わせ、一向こうに回し、天下の財を云ふし、神戸を舞台とする「海鳴りやま」が上演された。梅田コマ劇場に無理がなく、演技陣もまじった花登名作劇場。三井三愛を、まず水準を保つ舞台になつた。

物語は、急死した当主の葬儀の夜に始まる。未亡人となった鈴木よね（月丘夢路）は親族の反対を押し切り、金子直吉（藤岡琢也）柳田富士松（小島秀哉）西川文蔵（夏目俊）の三人の番頭、店のすべてを任せると宣言する。明治二十七年の夏だった。「店を大きくする仕事」を託された直吉は、女主人の信頼にこたえ、家を忘れ、全身全霊をこめて店の発展に打ち込む。そして二十三年、高畑誠一（仲真貴）の知識にも助けられて、神戸の、一介の砂糖輸入商は年商十五億四千万円の、世界の大商社に急成長する……

作・演出の花登は実録を元に、少々の創作を加えて港商人の歩みの跡を、主従の人間結びつきを克明にたどった。この作家が看板とする根性ものはひと味異なる、目指す男のロマンの香りにや

や欠けるもの、一つの時代と歴史を離かに描き出した。暗転を利用してのスライド解説やナレーションに、技法の古めかしさがつきまわったが、社会背景を伝え、場数の多さからくるコマ切れの印象を薄める効果があった。

アンサンブルも、思ったよりいい。際立ったスターのいないところがむしろ幸いして、月丘と藤岡をシンに、一人ひとりの人物像が

明らかにになった。なかでも月丘は情味十分。「お家はん」の貴録を押し出し、小島もワキへ回ったときのみまをのぞかせた。藤岡は例によって例のどけぶりや、型破りの商人像を活写したが、相手の呼吸を考えたか、第一幕の四、五場で間が乱れた。ほかにも、田崎潤はじめ岡崎友紀、藤岡花江、仲らの個性が生きた。 28

日まで。

(大)

(56・4・22 大阪朝日新聞)

〈御礼状〉

花の便りを待ちかねる、四月二日に初日の幕を開けました梅田コマ劇場、花登筐、作演出「海鳴りやま」は二十八日に無事千穂楽を迎えました。

港神戸に生れ日本の商社のルーツといわれる「鈴木商店」の大番頭、金子直吉を連日懸命に演じております中に桜の花を愛でるいとまもありませんでした共演の諸優と、連日満員のお客様の熱気あふれる御声援で、梅田コマ劇場は恰も桜花爛漫でございました。

これも一重に暖かいお心づかいを戴いたお蔭でございます。これからは東京でのテレビその他の仕事の日々に戻りますが、この一ヶ月の興奮と感謝は生涯忘れません。

ここに千穂楽の御報告と、ともに改めて厚く御礼申し上げます。有難うございました。

昭和五十六年五月吉日

藤岡 琢也

辰巳会昭和55年度決算

(55. 4. 1~56. 3. 31)

収入の部	金額	支出の部	金額
54年度より繰越		支 出	
現 金	125,933	大会例会費 (3回)	1,709,013
各 種 預 金	3,926,439	たつみ誌 (33・34号)	1,340,000
喜寿杯在庫 (69ヶ)	1,069,500	米 寿・喜 寿 杯 費	536,500
仮 払 金	2,500	支 部 経 費	550,000
供 養 塔 勘 定	△ 674,822	印 刷 費	120,650
仮 受 金	△ 2,000	名 簿・印 刷 費	420,000
計	4,447,550	通 信 費	452,550
		消 耗 品 費	20,390
収 入		旅 費 交 通 費	55,970
大 口 広 告 料	2,000,000	慶 弔 費	61,000
小 口 〃	680,000	雑 費	34,080
賛 助 金	311,500	計	5,300,153
預 金 利 息 費	108,776	56年度へ繰越	
大 会 例 会 々 費	754,000	現 金	22,122
計	3,854,276	各 種 預 金	2,879,173
		喜寿杯在庫 (45ヶ)	697,500
		仮 払 金	37,700
		供 養 塔 勘 定	△ 634,822
		計	3,001,673
合 計	8,301,826	合 計	8,301,826

供養塔勘定 昭和55年度決算

(55. 4. 1~56. 3. 31)

収入の部	金額	支出の部	金額
54年度より繰越		支 出	
本 勘 定 へ 預 け 金	674,822	供 養 塔 管 理 費	40,000
		計	40,000
		56年度へ繰越	634,822
合 計	674,822	合 計	674,822